

サンパトンから

渡部 忠世

1 稲の作柄と雨

今年の雨は異常におそく始まった。タイ北部のモチ稲地帯の稲作技術の調査が私の目的だが、限られた期間の中でなんとか移植期に間に合わせようとして、サンパトン (San Patong) についたのが7月13日。5月にしばらく降った雨がとだえたままであった。苗代がすっかり乾ききって苗が黄色く枯れかかっているのがめだった。

8月になると新聞も今年の雨季のおくれと、不作の心配を書き始めた。試験場にもまったく水がなかった。しかし、新聞が書き始めた頃から雨が降りだした。私には熱帯の雨季の経験ははじめてである。最初の頃は、こんなものかと思い、やがてこれはすごいと思い出した。いつの間にか水田を満した水が、道にあふれ町にもあふれ出していた。

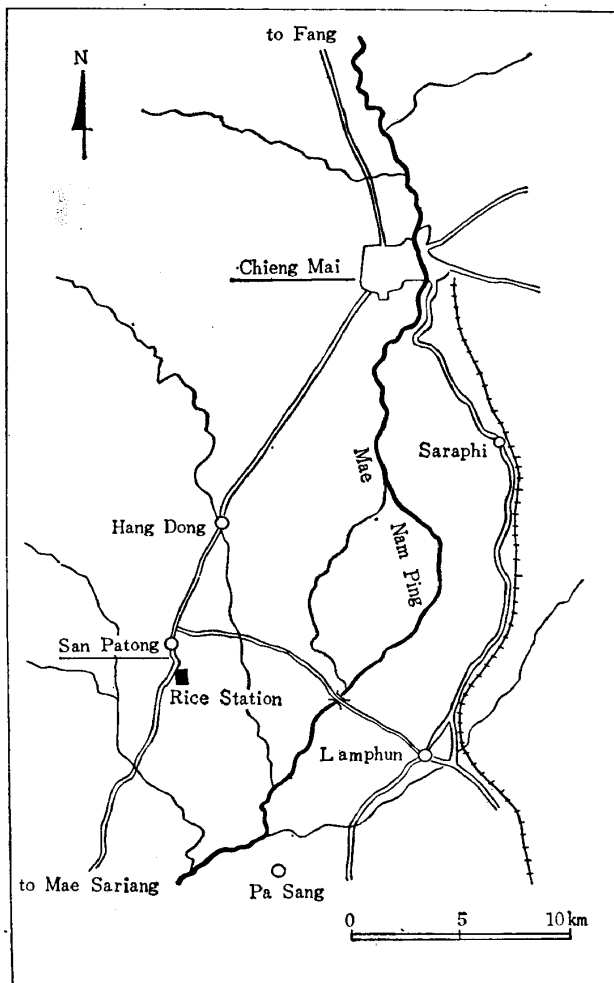
田植も急速にすすんでいった。一般に北タイでは田植は北にゆくほど早く、またピン (Ping), ワン (Wang), ヨム (Yom) などの河川の流域ほど早く始まる。サンパトンでは8月20日頃が田植の最盛期だった。この頃は連日大雨が降り続いた。色とりどりのビニールの布を肩にかけた農民が、家もまばらなのに、どこから出てきたかと思議に思われるほどに大勢で田植をしていた。

必然的に私の仕事も忙しくなり、外で雨にぬれることが多かった。しかし、雨のあいまに20分も日が照ると衣服が乾いてしまうほど、日射しはきつく、温度も高い。しかし同時に湿度も高く、温度較差も小さい。タイではもっともしのき易い地方というこのチェンマイ (Chiangmai) 盆地でも、やはり8月はかなり消耗する。

それでも雨量の絶体量は例年よりすくなくならしく、政府の発表では中央平原で約40万rai (約6万4千ha) の水田が植付け不能だと報じ、またこの北部

でもナン (Nan), プレー (Prae), ランパン (Lampang) の諸県などでは結局植付けを放棄した水田がかなりある。9月中旬にプレーに旅行した時には、苗代期間4か月という稲にぶつかった。5月のはしりの雨で播いたままついに9月まで本田に水がこなかったのである。これはもちろん例外だが、私の見聞の範囲では一般にプレー辺りが北部では一番水に不自由していて、9月末まで田植が続いた。

10月1日付けの政府の発表は、一部に田植のできなかった水田もあるが、全般に作柄は良好と報じている。最近、ファーン (Fang) やランパンへ旅行したが、たしかに立派な生育をしている稲が多い。バカ苗病の多発している水田もあるが、他にはこれといった病気もないし、まだ螟虫害もみうけられない。ファーンへ同行していただいた植物病理学の赤井教授が「日本にはこんなにきれいな水田はない」と感嘆しておられた。



そろそろ早場地帯では出穂し始めたが、これから倒伏や螟虫害でどんな収量になるか実のところ楽しみである。

昨年の米作 タイー はチェンマイ郊外のサラピー (Saraphi) の一農家があげた rai 当り 1,200kg (反当りに換算して玄米約 4 石) である。最初は半信半疑だったが、これも何回も調査に出かけてみて本当だと思った。今年もいけるのではないかと考えている。試験場の技術者にいわせると、競技会に出品しなかった水田にもそれと同等あるいは以上と思われるものがあったという。

とにかく北タイの特にチェンマイ盆地の稲作にかんする限り、そう見くびったものではないというのが、現在の私の感慨である。水さえあれば、この地方の稲作はかなりの高収量を易易としてあげられるのではないだろうか。熱帯の稲すなわち低収量という既成概念は、ここでは通用しないような事例が多いのである。一方では水のない、あるいはかかりにくい水田の作柄はみじめであり、その差はきわめて明瞭である。

水のあるなしが、作柄の良否に基本的に関与していることをあらためて確かめられた。その他のすべての条件にこれは優先する。灌漑条件がタイではよく整っているはずの北部でさえもこのありさまである。今年の雨がさらに遅れ、あるいはさらにすくなかったら、私はまた別の感慨をもったであろう。

日本の今年の稲の作柄は、低温や台風の影響で一喜一憂しているとききおよぶが、北タイにかんする限りでは、かなりの豊作年であることは多分間違いないであろう。私の調査がこういう年にぶつかったことは幸か不幸か別な考え方もあろうが、一つの可能性を確かめうるチャンスではある。私はよい年に来たと思って、いる。とともに、北部タイを選んだことも、いろいろな意味で好運であったろう。

2 サンパトンの町

私のいるサンパトンでも、直接にピン川から水のひける水田はごく僅かである。大部分の水田が水に苦勞した。メーターン (Mae Tang) のダムからの canal が 2 年後にサンパトンを通ずるといいうが、それまでは今年と同じように空をあおいで雨を待つしかない。

チェンマイから南へ 23 km。メー・サリエン (Mae Sariang) へ通ずる街道沿いの典型的水田地



写真 1 Pa Sangへの渡し

帯である。ピン川にかかる橋を渡ってランプーン (Lam phun) へ、また渡し船でパー・サン (Pa Sang) にも通じる (写真1)。ちょっとした買い物は自転車でランプーンへ出かけることが多いが、高校生もランプーンとチェンマイの両方に通学する者が多く、文化圏としては上の二つの都市にそれぞれ影響を受けているといえよう。

郡全体の水田面積は約 1 万 ha で、その他に若干の果樹園 (竜眼が主体) と、豆やタバコを主とした畑作物の栽培がある。水稻の二期作は皆無。川沿いでわずかに二毛作がおこなわれる。いわばモチ稲単作地帯として類型化される代表的な北タイ農村の一つである。

郡役場を中心にして小さな町がある。サンパトンにかきらないが、タイのこうした小さな町の景観を特徴づけて述べることはむずかしい。どこでもほとんど同じだからである。国旗のたっている役場と学校と郵便局の建物は、何か理由があるのだろうか、どこでも同じ建て方だし、道をはさんで、中国人とインド人の店が 50 軒ばかり並んでいるのでさえ、売っている品物まで大同小異である。それから数多くの寺であるが、サンパトンには山緒のあるような寺はない。寺の他にキ

リスト教の教会が一つ。中国人とインドを準タイ人とすると、この教会のドイツ人の家族と私だけが、今日サンパトンにおける異邦人である。こんな平凡なサンパトンで他の町にないものが私の6か月間滞在する稲作試験場(写真2)だが、これについては後で述べよう。

この町に来てしばらくして、年輩の男たちがかなり日本語の単語を知っており、中には簡単な会話のできる人もいるのに気がついた。聞いてみると、戦時中約3千人の日本兵がサンパトンの寺に宿泊していた名残りである。メー・サリエンを経てビルマに通ずる街道の要衝と考えられたのだろうが、とにかく3千人というのは、この町と同辺の人口を合せた数に匹敵する。平和なサンパトンの町にとって、日本陸軍の駐屯はまさに有史以来の異変であったに違いない。

平和な、と書いたが、私がこの稿を書いている10月中旬は、わけても平和なというべきか、のどかなというべきか、とにかく農閑期の最真中である。草取りは半月程前に終って、あとは来月中旬からの稲刈りを待つだけである。見はるかす水田に人ひとり姿のない時間が多い。たまに見かける人影は例外なく魚釣りする男女である。それかあらぬか、最近はとりわけ寺の行事が多い。今日も試験場の前の寺で催しがあって、善男善女が寄り集まり朝から夜までガヤガヤしていたが、先週はあちらのお寺、またその前はこちらのお寺と人の集まりがある。町のはずれに仮設の映画館と、ボクシングの小屋が組まれているのも、農閑期めあてのドサ廻りの一座であろうか。チェンマイまでバスで

30分たらず、またランブーンまで自転車で40分(バスは通じていない)で、そこには映画館などもあるが、農民にとっては無縁の存在であるらしい。寺を神社に、ボクシング小屋を芝居小屋におきかえてみると、そう遙かな昔でない日本の農村のありふれた秋祭りの風景が想い出される。同じ水田耕作民族として生活のリズムみたいなものはごく似かよっていることを痛感させられる。

しかし、平和で、のどかなサンパトンの風景も一面の現象にしかすぎない。大部分の農民がきわめて貧しい生活に明け暮れていることは、ここもタイの水田農村一般からの例外ではない。サンパトン第一の大地主は水田400rai(約64ha)を所有しているが、5rai(約80a)農家というのも、完全な小作農も多い。人口はだぶついておりながら吸収する産業はもちろんない。私のいる試験場の常雇になるのも、なかなか難しい就職だと聞いている。

3 稲作試験場

貧しさの話がでたから、その続きから書く。この試験場には常雇の農夫さんが約60人いるが、古参か特殊な技能(たとえば耕耘機運転とか大工とかの特殊技能)を持つ数人を除くと、日当は7バーツ(約125円)というのが普通である。ちなみに常雇といっても日本とは事情が異なり、賃金は日割りの計算で、1日休めばそれだけ賃金がすくなくなる。私が実験田の手入れや簡単な計算のために雇った中学出の青年に日当10バーツを払っているのは、ここでは破格の給料であるらしい。

仕事はしごく単調でのもろびりしている。1日中出穂した稲の横に立って、ホーイ・ホーイとさけんで雀を追っている娘さん。朝から晩まで一列横隊にならんで足で泥田の草をふみこんでいる老若男女もいる。余談だが、ともすると脚気きみの私は、あの仕事は足がしんどいだろうといつも同情にたえない。

職員は場長以下技術者が6名、技術補助者1名、他に若干の事務員がいる。若い技術者は全部バンケン(Bangkhen)の農科大学の卒業生



写真2 稲作試験場の正門付近

で、うち1名はイリノイ大学へ、また1名はコロンボ・プランで日本に留学してきている。彼等の専門は育種2名、作物2名、病理と昆虫がそれぞれ1名である。

この国の稲作試験場が従来は Rice Department の Breeding Division に属して、まったく採種場の役割りしかしていなかったことを、前回の報告（本誌、Vol. 2, No. 4）にも触れたのであるが、昨年来その性格を明らかに変えつつある。ここやピマイ（Pi-mai）その他二・三の試験場に Technical Division の分室が設けられ、サンパトンには8月から初めて病理や昆虫の研究者が滞在することになったのである。といっても、やはり主体は育種後代の選抜で、交雑も若干は行なわれるが、大部分は中央のバンケーンの試験場やIRRI、あるいはいわゆる Cuttack Hybridとして送付されてきたものについて収量や諸特性の検定が主な仕事となる。

その他に、どういふ実験がおこなわがていふかを説明することは簡単ではない。いずれにしても、電気・ガス・水道いずれも不完備なのだから、圃場を使った栽培実験や各種薬剤のふっかけ実験などしか期待できないわけである。それらの実験の目的などを試験場の技術者に直接聞いてみても、あまりはっきりした説明はできないはずである。というのは中央から実験計画書が送られてくるが目的はくわしく書いてない。とにかく、たとえば施肥量を3段階、植付けは何月何日で、品種はこれこれを使えと書いてくる。そして、植付け何日後と何日後の植物体を送付せよである。中央からだけでなく、その他から依頼される場合もだいたい同じようで、その結果がどうなったかはここではわからない。これでは、正直なところ説明させるのが気の毒で、栽培している当事者が「こんな実験らしい」としかいえなくても彼を非難することはできない。

私がタイへやってきて二・三日後に、農林省で二・三の高官と雑談をしていた時、この国の研究成果が遅延としてあがらないのはなぜだろうかということが話題になった。あるいは予算がないとか、実験施設・器具の類が乏しいとかが理由としてあげられたが、稲作に関する最高の責任の地位にある人が「問題は人である」と言下にいい切ったのが、私には非常に印象深かった。しかし、サンパトンで現場の技術者と3か月以上も毎日を一緒に送り、上のような彼等のおかれた

状態を理解してくると、たしかに「人」に問題があるにしても、その前提として全く中央集権的な研究の system や行政の組織に大きな問題があることがわかる。いま私は「人」すなわち現場の技術者達の弁護者の立場にあることを自覚し出している。

彼等はきわめて親切である。そして私のおこなう簡単な実験に対してもきわめて深い関心を示す。時に半日近くも横に座わられて「それは何か」、「何故そんなことをするのか」などと disturb されることもあるが、彼等の好意と親切の代償としては問題にならない瑕瑾である。そして例外なく美人の奥さんをもって幸福そうである。いずれもチェンマイ近辺の金持のお嬢さんだそう。日本でも「学士様なら……」という時代があったと聞かすが、サンパトンともなると、まさに学士様は稀小価値なのであろう。

試験場の水田面積は190rai（約30ha）とかなり広い。途中で丸木橋を渡ったり、木陰で汗をふいて休みながらひと廻りすると小半日かかる。私はまだ2回しか全部を廻っていない。別に用はなくとも、また半日がつぶれようとも、この水田廻りを何回もやらない限りは、私はサンパトンの試験場のよそ者であろう。どうやっても、「よそ者」には違いないのであるが、やはり水田を廻り歩けば歩くほど人とも稲とも心が通じるようである。涼しい日をえらんで、これから何回も廻り歩くことを実行するつもりである。

4 モチ稲のこと

サンパトンの試験場の対象はモチ稲で、ウルチ稲は見本程度にしか栽培していない。このタイ北部と東北部のラオス寄りの一帯がもっぱらモチ稲を栽培し、またそれを常食とする地帯であることによる。さらに、これらの地帯は北ベトナム、ラオス、北ビルマをふくめての北緯20°線をはさむ東南アジアのモチ稲栽培地域の一部を形成している。これらと国境を接する中国の南部諸省にも、おそらくこうした地帯が存在するとみられる。

なぜこうした地帯が形成されたかの理由としては、今のところは住民の嗜好上の選択としておくのが穏当であろう。この地域でも、多くの山岳民族はモチ稲を主食としていないのも興味ある問題だと思う。だから、同じ焼畑の陸稲でも、タイ族だとモチ稲を栽培し、山岳民族だと主にウルチ稲を栽培して、モチ稲は酒造用

にわずのかに栽培されるにすぎない。

統計によるとタイ全土の水田面積に対してモチ稲の栽培面積は約40%。これが北部では90%、東北部では70%となり、いかにタイ国の稲作にとってモチ稲が重要な意味を持っているかが理解できよう。モチ米はほとんどが国内消費であるが、毎年日本にも輸出されているし（昨年度が約1万トン、今年はさらに上廻る見込みとのこと）、またラオスに非公式に流れる量かなりあって、正確な輸出量はなかなか把握できないそうである。

では北タイの住民はウルチ米を全然食べないのかというところでもない。主観的な観察によると富裕な階層ほどウルチ米の消費量が高いようである。一般の農民は例外なく三度三度をモチ米であるが、ちょっと裕福な家では夕食をウルチ米にすることがある。貧乏人は麦ならぬモチ米を食うのである。知人のインテリに「あなたもモチ米が常食か」と聞くと、ちょっといやな顔をされて、「いやウルチ米だ」といわれた事がある。バンコック風の（日本でいうなうば東京風の）流行なのか、あるいはあんな農民の食べものがというプライドなのか、または副食物の差などにも原因があるのかも知れない。

しかし、あのバラバラのウルチ米よりも、私にはモチ米が好ましい。インテリのおもわくなど無視して、私はモチ米を愛好している。インドでないから、どちらの手を使ってもかまわない。ただ食べすぎると腹にもたれるのが最初のうちは閉口であった。

写真3に示したのがモチ米の炊飯道具で、原形は日本の蒸し器と同様で、七輪の上の土器に水を入れる。上部の容器は木製（チーク製が最上等）で、底部は取



写真3 モチ米の炊飯道具

りはずしができる。この底部は周りにすきまができるようになっている。最近では小さな穴をあけてあるものもあり、そこから蒸気が上ってくるしかけである。どういう加減か日本の蒸し器や蒸籠（せいろ）にくらべると炊きあがりがかかなり早い。試験場長から一式を寄贈されたので、こわれないように持ち帰って、あらためてわが家で試してみるつもりでいる。

（10月18日稿）